

# <今週のお宝盤>

受付期限：2026年2月18日

## 第9087番 豪快！ バイロン・ジャニスのチャイコフスキー



税込22000円

米マーキュリー／SR90266／初期ブラム手書き／1960年録音／ステレオ／オリジナル／G  
チャイコフスキー ピアノ協奏曲第1番 バイロン・ジャニス（p）／ロンドン響／メンゲス

ホロヴィッツの愛弟子で、協奏曲のデビューがトスカニーニとの共演だったジャニスは2年前に95歳で亡くなった。ヴィルトゥオーソ的側面のみ喧伝され、このレコードに聴かれる内面的で豊かな感性に溢れた表現は見逃されがちだが、最も影響を受けたピアニストはコルトーやラフマニノフであり、情緒あふれる演奏は至る所に聴かれる。若い時、一本の指の感覚を事故で失うと言うピアニストとして決定的なダメージを受けたが、克服したのはたゆまぬ努力のたまものである。鉄のカーテンの時代にアメリカ人ピアニストとして初めてソ連に派遣されたことは、チャイコフスキーのピアノ協奏曲演奏にどれほど豊かなインスピレーションを与えたことだろう。この演奏の中にロシア人の誇りと郷愁までが窺われる。加えて恩師ホロヴィッツの助言も多かったことだろうが、恩師がトスカニーニと共演した同曲の演奏よりは遥かに均整がとれている。加えて、マーキュリーのワンポイント録音は明快な演奏をしっかりとキャッチし、一方ではどのような弱音や、ささやくような木管楽器の響きまで驚くほど鮮明に伝えている。蛇足だが、ジャニスの奥様はゲイリー・クーバーの娘である。（山田）

## 第9088番 ルドルフ・ケンペのドイツ・レクイエム



税込17600円

英EMI／ALP1351-2／2枚組／1955年録音／モノラル／G

ブラームス ドイツ・レクイエム F=ディースカウ（Br）、グリュンマー（S）、

聖ヘドヴィヒ大聖堂合唱団／ベルリン・フィル／ケンペ

この演奏は「ドイツ・レクイエム」の最高峰であると同時に、モーツァルトのレクイエムと並んで、ケンペが残した名演の一・二を争うものである。特筆すべきは格調高い合唱にある。当時東独にあったヘドヴィヒ大聖堂だが、音楽には大きな垣根が無かったのだろう。彼らはフリッツァイの「第九」という名盤も残している。聴けばすぐ分かるが、実に息の長い合唱はロング・トーンでいささかの乱れも無いのだ。ソプラノのグリュンマーはカラヤンに見いだされてアーヘン歌劇場でデビューした。ここではキャリア十分の44歳でヴィヴラートの少ない落着きある歌唱が聴かれる。僅かに暗い音色は意識していることだろう。面白いのはジャケット裏面の写真でグリュンマーは合唱団の中で台に乗り一段高くなって歌っている。このようにして録音したのでまるで合唱団の一人が歌っているかのように、ソリストの声は溶け合っている。30歳のF=ディースカウの声は柔らかく丸い。独特の強いアクセントもまだ気にならない。この作品はブラームスが残した最大のドラマである。ジャケットもまた素晴らしい。力強い二人の農夫は「生」そのものである。この曲は「生」を謳歌しているのかも知れない（山田）